「3.11 伝承ロードNew Destination プラン」
第１回　三陸沿岸道路エリア活性化検討会

日時：令和４年７月 13 日（水）14 時 00 分～
会場：フォレスト仙台　２階「第 10 会議室」

議事録（意見交換内容）

●南三陸ホテル観洋　阿部委員
・コロナで人流が停止した。
・修学旅行・教育旅行としての来訪は OK。海外から国内に回帰しており、学習として県内沿岸部に来ている。
・沿岸部の指導者（先生）が震災のことを理解していないのが課題。
・移動は便利になったが、空洞化しないようにしたい。
・ハーフ IC の案内が重要と考えている。

●（一財）VISIT はちのへ　阿部委員
・八戸は世界遺産や国宝もあり、歴史的な地域。みちのく潮風トレイルの起点・終点でもある。
・震災復興としては、他県と比べ被害が小さかったが、一緒に進めていきたい。

●道の駅「たのはた」 石井委員
・道の駅「たのはた」は R3.4 にリニューアルした。三陸道を降りる必要があり道の駅の経営としては厳しい。
・遠くから来る客もおり、今後どう変化するか期待している。
・生活は困ることなく便利になった。通過が増えないか不安ではある。

●整備局道路計画第二課　伊藤課長
・三沿道開通後、大型車を中心に増加。企業・工場立地が進んでいる。
・休憩施設もあり、休憩施設を目的としている来訪者もいる。
・H30 年から「道・絆プロジェクト」というプロジェクトを立ち上げ、復興道路及び復興支援道路を活用した広域的な連携交流を目的とする事業の支援を行っている。
・近年この事業が増えて来ている。道路が繋がることで更なる横のつながり強化を期待している。

●岩手日報社　太田代委員
・震災から 11 年が経ち、コンテンツが変わってきている。今後新たなコンテンツが必要。
・取材を通して心に響くストーリーが鍵となると感じた。生の声を聞くことができたり、体験出来たりすると良い。（出来ている所と出来ていない所がある）
・震災経験者が少なくなっているため、指導者が学べる場所・機会があると良い。

●（一社）東北観光推進機構　紺野委員

・新たなモデルルートを作るというよりは、デジタルを活用して提供することが必要。10 エリアでは多くて難しい。現事業計画では今後続かない。
・三陸エリアは沖縄・広島・長崎のような教育地域になる。これをマーケット（旅行会社・学校等）にどのように提供するかが重要。語り部の育成が必要。
・地域によって被害状況、復興のプロセスが異なる。それらを拾い上げ三沿道に結び付けてマーケットに提供することで誘客につながる。
・趣旨は素晴らしいので道路を基軸として再度協議し、将来的な誘客・直近の話題性につなげていくことが賢明。

●岩手県復興防災部　復興推進課　澤田課長
・このような取組は、県等でも既に取り組んでおり、最終的な目標・成果を「旅行事業者によるツアー造成・商品化・実施」とする取組を行っていかないと二番煎じで終わってしまう。
・こうした点を踏まえた場合、エリア住民向けのニーズ調査はどこに反映されるのか？
・モニターツアーは、旅行事業者向けのものも必要。
・情報発信は外部向けに行うべきであり、内向きの活性化フォーラムを行う必要はあるのか。

●青森県県土整備部　都市計画課　田中課長
・ツアーにはオリジナリティが必要。
・三沿道主軸＋地域特性・特徴（道の駅等）を最大限活かしたツアーが必要。

●岩手県北自動車株式会社　平澤委員
・久慈・八戸線は 8 月～12 月まで実証実験を継続。高田～仙台は現在運行していない。
・国内企業の研修用に観光プログラムを作った。毎年 1,000 人くらいいたが現在は 500 人程度。
・モデルルートではなく目的志向で。「危機管理ならここ」という具合に目的を絞ったコンテンツが必要。民間事業だけでは先細り。機構なら官民を結び付けられると思う。
・三陸の宿泊施設は決まったところにしかないため、団体の周遊ツアーは内容がほとんど変わっていない。
・当社は地域と連携して新しいツアーを行っている。JR はいち早く着地型の旅行プランの開発を行ったが、大手旅行会社は儲からないからやらない。地元の旅行会社が旅行プランを作って大手旅行会社に提供するような仕組みがあっても良い。その取組みを通じて三陸の旅行の仕組みを変えても良いのでは。
・高速バス（宮古・気仙沼・仙台線）は平日 8 人、土日 12 人ほどの乗客がいたが、現在 5 人ほどしかいない。ドライバーの勤務体系が厳しくなる中、道の駅が IC から 5 分では厳しい。本線の休憩施設が必要。

●河北新報社　安野委員
・本事業の目的を明確に。
・自治体ごとに観光客の戻りにバラツキがあり、戻りが少ない自治体にも光をあててほしい。
・報道の仕方によって注目され方も異なる。
・観光客が利用しやすいアウトプットが必要で、具体なものである必要はない。

●宮城交通株式会社　脇田委員
・高速バスの乗客はコロナの影響で約 4 割減。高速バスで市内の赤字路線を支えていた。
・コスト高騰等により補助をもらっているが厳しい。安全を十分に確保しつつ効率化を図る対策を行っている。（運転手 2 人体制→休憩を多く取る等の工夫を行い 1 人体制へ）

・観光バスは修学旅行・遠足等はだいぶ客足が戻ってきた印象。一方で団体旅行が皆無に近い状況。東北はもともと少ないがインバウンドも減少。
・今後は更なる業務効率化を図りつつ、デジタル化、MaaS の取組等も取り入れていきたい。

●事務局
・先ほど各開発対象エリアの考え方わかりにくいとの指摘があった。三沿道は非常に長いルートなため、全体で見るとぼやけてしまう。わかりやすくするため 10 エリアにわけた。
・ルートのあり方、考え方に関しては現在模索中。

●（一社）東北観光推進機構　紺野委員
・現状のマーケットをしっかり把握する必要がある。
・教育旅行の誘致が極めて重要なポイント。語り部・ガイドの育成、エージェントに対する素材の提供に特化すべき。

●東北大学災害科学国際研究所　奥村教授
・何を伝承するのか。3.11 は古くなっていくが、その経験を学ぶことには意味はある。学びはそこで生まれる。
・コンテンツとストーリーは別。ストーリーが極めて大事。
・一度で理解する必要はなく、何度も行きたくなるような奥深さが必要。
・「気仙沼大島大橋の上から一望する」というコンテンツはどうか。

●南三陸ホテル観洋　阿部委員
・語り部も時間とともに語る内容が変化していく。力のある語り部の伝承をしていきたい。

●（一財）VISIT はちのへ　阿部委員
・三沿道開通で時短になり、八戸からの移動も南にだいぶ進んだ。
・陸前高田の伝承施設も広島の様になれるのでは。
・八戸でも教育旅行を行いたい。きっかけ作りになれば良い。

●道の駅たのはた　石井委員
・震災がきっかけで田野畑に来た。移住して 5 年になるが、震災が形骸化されつつある。
・「何を伝えていくか」が大事。

●整備局道路計画第二課　伊藤課長
・デジタル化が情報発信として重要。
・行ってみたいと思ってもらえる繋がり方があると良い。

●岩手日報社　太田代委員
・震災を経験していない先生が生徒に伝えるのは難しい。事前に生徒に向けた情報コンテンツが必要。
・教育旅行の場合は現場の先生の意見を聞いても良いのではないか。

●（一社）東北観光推進機構　紺野委員
・気仙沼でブルーツーリズムの動きあり。情報を繋げるツールとして道路が重要。
・3.11 伝承ロード機構として地元の動き、イベントをピックアップしてつなぎ合わせる必要がある。

●岩手県復興防災部　復興推進課　澤田課長
・現在県の総合計画第二期アクションプランを策定中。三沿道は重要な位置づけとされている。
・この検討会での議事内容を取り入れて行きたい。

●青森県県土整備部　都市計画課　田中課長
・未来への持続可能な取り組みが重要。

●岩手県北自動車株式会社　平澤委員
・事業として 3 年計画だが、ランディングページを先に立ち上げた方が良い。

●河北新報社　安野委員
・事前学習等でも現地の人とリモートで繋ぎ、直接話を聞くと良いのでは？
・略称は「三沿道」？「三陸道」？一般の人がわかる表現が欲しい。

●宮城交通株式会社　脇田委員
・青森→宮城・岩手の視点も入れて議論してほしい。